

陳 情	受 理 番 号	129	受 理 年 月 日	令和2年3月16日	付 託 委員会	総 務
件 名	首里城正殿大龍柱に関する陳情					

## 首里城正殿大龍柱に関する陳情書

那覇市議会の皆様、常日頃、市民のためにご尽力なさっていることに感謝申し上げます。そして皆様の活躍を見守る市民として切なる陳情をしたいと思います。

さて、首里城の焼失後、那覇市は再建に向けて奮闘しています。私たちも沖縄のシンボルとしての首里城のあるべき姿を議論してきました。その過程で、若狭の巨大龍柱が海に向かってるように、首里城の大龍柱も御庭に向け、共に来訪する客を迎える姿に変えるべきだと考えました。

首里の大地を風水で読むと、北に虎頭山（白虎）の尾根、南に識名（青龍）の尾根が連なり、その両翼の「気」は弁が嶽（玄武）に集まり、正殿龍穴へと流れ、さらに屋根の龍頭棟飾りに駆け上がり、城内、欄干を通じて大龍柱、御庭へと吹き出ます。そこから那覇の街を潤し海へと注ぐものと考えられます。首里城が築かれた初期から、王のシンボルとして龍柱は琉球独特の型と美を誇っていました。

現在の龍柱は、欄干から切り離され台石に直立し、しかも向き合っています。その姿では大切な龍脈の流れが断絶されてしまいます。私たちは、首里城再建の際に、龍脈の流れを本来の形に戻したいと願っています。

上杉県令日誌（明治14年）には、「大龍柱の眼光は御庭を向き睥睨し、鎌首を持ち上げ屹立していた」と記されています。また、比嘉春潮は、1972年、沖縄タイムスに、「昭和の解体修理に尽力した伊藤忠太博士も相対向きは誤りだと述べた」と書いています。そして今、発掘調査資料からも新たな情報が出つつあります。

さて、前回、復帰記念事業としての首里城再建の時にも大龍柱について議論がありましたが、十分なものではありませんでした。そのため、完成後も龍柱の向き、龍脈論を巡って、市民の間に釈然としないものが残り続けています。

この度の再建事業に当たっては、首里城周辺の調査、復元についても議論がなされており、市民として大いに期待しています。その気運の中で、「若狭の巨大龍柱」がニライカナイの海に向かうように、「首里城の大龍柱」も遠来の客を迎える形に変えるためにも、ぜひ那覇市議会にて議論をしていただきますよう陳情致します。